
遊戯王ZEXAL ～転生少年の生き様～

アストラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王ZEXAL 〈転生少年の生き様〉

【Nコード】

N8637T

【作者名】

アストラル

【あらすじ】

いきなり遊戯王ZEXALの世界に行かされる事になってしまった少年、不動裕也の生活を描いた物語です。

転生（前書き）

この作品はもう一つ俺が投稿している作品のキャラが少し登場します！

転生

Side???

康太の葬式が終わったなあ・・・。

「何で、何で死んだんだよ！馬鹿野郎！何でなんだよ！クソッ！」

康太は俺の親友で俺の唯一の親友だった男だ・・・。

昨日死んだがな・・・。

何であんな良い奴が死んじゃうんだよ！

あいつは家族の為に体張って生きてきた奴だった・・・。

「ううつ・・・お兄ちゃん、何で死んじゃったの？ねえ何でなの？」

「優、落ち着いて・・・。頼むから・・・。」

「・・・お婆さん、元氣出してください・・・。」

「ごめんね。家の馬鹿康太が裕也君を悲しませて・・・。」

「いえいえ、優君やお婆さんの方が悲しいんですよ・・・。わかっていますよ・・・。」

「ごめんね、本当にごめんね」

「気にしないでください・・・。」

「じゃあね」

「はい」

・・・数分後・・・

「何だあの氷の柱は!？」

俺はそう言うとその氷の柱に引き付けられる様に足が進んで行った。

「うわっ！何だ？何なんだ!？」

俺は氷の柱に吸い込まれてしまった・・・。

・・・数分後・・・

「んあ？ここは、何処だ？」

ここはまるで辺り一面は真っ白で俺は浮いているような感じだった。

『お前さんは死んだ・・・わしの責任じゃ。あの日って言っても昨日じゃが康太を転生させたのを思い出すのお・・・』

「あの氷の柱は何だったんだ！？そして俺に何をした！答えろ、トリシューラみたいなの！」

『落ち着いて聞け。康太はわしのせいで死んだ・・・。あれはわしの責任なんじゃ！だからわしは康太に無断で遊戯王デュエルモンスターズGXの世界に転生させた。しかし君はGXの世界には送れないんじゃ。しかし転生はさせる』

「わかった・・・。なら俺はまだ始まってないが遊戯王ZEXALの世界を選ばせて貰う！」

『わかった。名前はとうするんじゃ？』

「俺の名前は不動裕也だ！親から貰ったこの名前は絶対捨てない！」

『わかった・・・じゃあな』

こうして俺は遊戯王ZEXALの世界に行く事になってしまった・・・。

Side End

「いえ、気にしないでください・・・」

海老と外道とシンクロン(前書き)

裕也のデッキの一つです。

海老と外道とシンクロン

Side 裕也

・・・マジで転生したらしいな。

トリシューラは夢じゃなかったようだ。

てか俺のデッキ達もちゃんとあるしあいつ良い奴だったんだな！
転校生として明日から九十九遊馬と同じ学校に入れるんだな！
ワクワクしてきたぞ！

・・・次の日・・・

「今日は転校生が来ています。不動裕也君、入ってください！」

・・・あの特徴的な海老頭は正しく九十九遊馬！

「俺の名前は不動裕也だ！皆、よろしく！」

「ではあの席に着いてね」

「わかったよ」

あの席って九十九遊馬の隣だと！？

まあいっか。

「不動裕也だ。よろしく！君の名前は？」

「俺は九十九遊馬だ！よろしくな！一緒にかっとビングしようぜ！」

「私は観月小鳥よ。よろしくね」

「九十九、観月、よろしくな！」

新しい友人は出来たが・・・どうしようか？

「うわっ！」

バサッ！

「あっ、俺のデッキ！」

「裕也、お前デュエルするのか？」

「ああ！デュエルするか？」

「放課後な！」

「ああ！」

・・・放課後・・・

「行くぞ遊馬！」

「来い、裕也！」

NoSide

「デュエル！」

「俺のターンドロー！俺はズババ・ナイトを召喚！」
薄い黄色い体の双剣を持つモンスターが現れる。

ズババ・ナイト

ATK1600

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

遊馬

手札 4枚

モンスター ズババ・ナイト

魔法罫 リバースカード1枚

「俺のターンドロー！俺は手札よりレベル・ステイラーを捨て、
クイック・シンクロンを特殊召喚！」

二丁の銃を持った機械で出来たガンマンが現れる。

クイック・シンクロン

ATK700

「見せてやる！シンクロン達の全力を！レベル・ステイラーを効果により特殊召喚！」

背中に一つの星が描かれたてんとう虫が現れる。

レベル・ステイラー

ATK600

「魔法カード、調律を発動！デッキからジャンク・シンクロンを手札に加え、シャッフルし1枚デッキの上から墓地に送る！レベル1レベル・ステイラーにレベル4クイック・シンクロンをチューニング！現れる、ジャンク・ウォリアー！」

青い体を持つ機械的なモンスターが現れる。

ジャンク・ウォリアー

ATK2300

「ジャンク・シンクロンを召喚！」

頭にオレンジ色の鍋をかぶった機械のようなモンスターが現れる。

ジャンク・シンクロン

ATK1300

「効果によりグローアップ・バルブを特殊召喚！」

真ん中に一つの目を持つ球根のようなモンスターが現れる。

グローアップ・バルブ

DEF100

「レベル5ジャンク・ウォリアーにレベル3ジャンク・シンクロン

をチューニング！現れるレッド・デーモンズ・ドラゴン！」
赤い体の悪魔のような龍が現れる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン
ATK3000

「クリエイト・リゾネーターを特殊召喚！」
背中に扇風機をつけたような悪魔みたいなモンスターが現れる。

クリエイト・リゾネーター
ATK800

「レベル8レッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル3クリエイト・リゾネーターとレベル1グローアップ・バルブをチューニング！現れる！スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！」
レッド・デーモンズ・ドラゴンが邪悪になったような悪魔の龍が現れる。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン
ATK3500

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは墓地のチューナーの枚数×500ポイント攻撃力が上がるぜ！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン
ATK3500↓5500

「・・・攻撃力5500!？」

「このターンで終わりだ！サイクロンを発動しリバースカードを破壊する！」

「あっ！俺のバイバイダメージが！」

「レベル・ステイラーを効果により特殊召喚！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンでズババ・ナイトを攻撃！」

遊馬

LP 4000 ↓ 100

「レベル・ステイラーでダイレクトアタック！」

遊馬

LP 1000 ↓ 0

Side 裕也

「俺の勝ちだな」

「くっそうまた負けた！」

「効果を全部覚えて、デッキの使い方も覚えて、何度もデュエルしてれば強くなれるさ！」

「ああ！またデュエルしような！」

「もちろんだ！」

こうして俺は転生してからの初デュエルに勝利した。

Side End

海老と外道とシンクロン（後書き）

裕也はいくつものデッキを操ります！

鮫と外道

Side 裕也

「遊馬、止めとけ！跳び箱20段は危ないから！」

「無理よ、遊馬は絶対、俺はかっとビングするんだ！って言って聞かないから・・・」

「言えてるな。デブ男もそう思うだろう？」

「俺はデブ男じゃなくて鉄男な！」

「もう・・・デブ男君も止めてよ・・・」

「デブ男じゃないって言ってるだろう！」

「かっとビングだ、俺え！」

あいつ・・・飛びやがった！

ガタン！

やっぱり失敗したな。

「だから危ないって言っただろ・・・」

「かっとビングだ、俺」

「皆笑ってるぞ」

つーか次の時間、水泳かよ・・・どんな時間割だよ。

・・・数分後・・・

それ・・・失敗したら死ぬって・・・。

「無理無理、25mを息つき無しで泳ぐなんて無理だって」

「俺もそう思う」

「裕也まで・・・絶対やってやる！かっとビングだ、俺え！」

「止める、遊馬！デブ男、止めてこいよ！」

「デブ男じゃねえ鉄男だ!」

「ならてつを、早く止めてこいよ!」

「発音がおかしいぞ!」

「大丈夫だ、問題ない」

「問題あるだろ!」

遊馬が浮いてきたな・・・。

「かっつとビングだっ俺」

「命を大切にしろ!」

・・・数分後・・・

「デュエルしようぜ!」

「20戦中全敗でよく嫌にならないな」

「俺は将来デュエルチャンピオンになるんだ!」

遊戲のあのバランス悪いデッキや蟹の低レベルの効果モンスターを中心にしたようなデッキを組むのかな?

「あそこでデュエルしてるの、鉄男じゃないか?」

「確蟹デブ男だな」

「【かに】の部分の発音おかしくないか?」

「元からだ。何でなのかは知らないな・・・」

無論意識してやってるけどな。

「遊馬、デブ男君の相手って?」

個性的な髪型だな。

「シャーク!」

「エクシーズ召喚! 同じレベルのモンスターが2体以上フィールドに揃った時そのモンスターを素材としてモンスターエクシーズを特殊召喚する。俺はレベル3のスカル・クラークンとビッグ・ジョーズをオーバーレイ! エクシーズ召喚! 来い! 潜航母艦 エアロ・シヤーク」

「エクシーズ召喚?」 「ああ、エクシーズ召喚最大は、素材となっ

たモンスターは墓地へ行かずオーバーレイユニットとなってモンスターエクシーズをサポートするんだ！俺は1枚もモンスターエクシーズを持ってないけどとにかく凄いだぜ！」

「行け、エアロシャーク！ダイレクトアタック」

デブ男が負けたな。

「鉄男・・・」

シャークが近づいてきたな・・・個性的な前髪のせいで笑いそうだ。

「ふん、約束どうりコイツはいただくぜ」

「鉄男のデッキをどうするつもりだ？」

「誰だお前？」

「俺は九十九遊馬。コイツのクラスメイトだ」

「お前、このお方が誰か知ってるんだろうな？」

「ああ、知ってるさ。この学校1の札付き、シャーク！」

「言ってくれるな。だがこれは正当な報酬だぜ？」

賭け事が正当な訳無いだろ・・・。

「何！？」

「今のデュエル、俺達は互いのデッキを賭けた」

「何でそんなこと？」

「コイツ等に俺はデュエリストを名乗る腕じゃないって因縁つけられて」

「くっ……。なら俺がコイツをデュエルで倒してデッキを取り返してやらあ！」

「バーカ、シャークさんは全国大会に出場してた程の腕だぜ？」

「てめー等が勝てる相手じゃねえ」

「そんなのわかるかよ！俺だってデュエルチャンピオン目指してるんだ！」

「デュエルチャンピオンだと？お前は、デュエルチャンピオンがどれほど物か知っているのか？」

「それは・・・知らないけど」

「ならそんなこと、軽々しく口にするんじゃないえ！」

「夢を見るのは俺の自由だろ？」

「夢ねえ。このデッキを返して欲しかったらお前の一番大事な物を差し出しな！」

「俺の一番大事な物・・・」

遊馬がそういった後、遊馬は、首に提げているペンダントを見つめた。その後、すぐにシャークは遊馬が首に提げているペンダントに手を伸ばした。

それを引っ張り、紐を切った

「何すんだよ！」

「これ以上は許せねえな！」

そう言うってから俺はシャークにタックルをかました。

「何をする！」

「人の物を壊そうとすんな、変な前髪！」

「変な前髪だと？許さねえ、デュエルだ！」

「まあ待ってくれよ。今日俺が、明日遊馬が勝てばデブ男のデッキを返してくれないか？」

「良いだろう！デュエルだ！」

今回は絶対勝たなきゃならねえ・・・コイツは康太と同じ日に同じ店でパーツを買って組んだ、俺達の友情のデッキ・・・そして俺達はそのから改造して全く同じデッキから違うデッキに変えたデッキだ！

「行くぞ、シャーク！」

NoSide

「「デュエル！」」

「シャーク、俺から行かせてもらおう！俺のターンドロー！俺はカードを3枚伏せて、モンスターをセット、ターンエンド！」

裕也

手札 2枚

モンスター セットモンスター 1体

魔法罫 リバースカード 3枚

「俺のターンドロ―！俺はドリル・バーニカルを召喚！」
体中にドリルが生えているアンモナイトのようなモンスターが現れる。

ドリル・バーニカル

ATK300

「アクア・ジェットを3枚ドリル・バーニカルを対象に発動！」

「「出た！シャークさんのマジックコンボだ！」」

ドリル・バーニカル

ATK300↓3300

「「攻撃力3300!？」」

「まあ気にする数値かわからんな」

「ドリル・バーニカルでダイレクトアタック！」

ドリル・バーニカルが回転しだすと、裕也に向かって飛んできた。

裕也

LP4000↓700

「コイツにはダイレクトアタックに成功した時、攻撃力を1000ポイントアップする効果がある」

ドリル・バーニカル
3300↓4300

「これで俺はターンエンド」

シャーク

手札 2枚

モンスター ドリル・バーニカル

「俺のターンドロー！リバースカードオープン！インフェルニティ・インフェルノ！効果により、手札のインフェルニティ・ネクロマンサーとインフェルニティ・リベンジャーを墓地に送り、デッキからインフェルニティ・デーモンとインフェルニティ・ビートルを墓地に送る。インフェルニティ・ミラージュを反転召喚！」

赤い髪が生えた、マスクを着けた、くぐつのようなモンスターが現れる。

インフェルニティ・ミラージュ

ATK0

「カードを1枚伏せて、インフェルニティ・ミラージュの効果発動！コイツをリリースし、インフェルニティ・ネクロマンサーとインフェルニティ・ビートルを特殊召喚！」

骸骨をかぶったような悪魔と巨大なカブトムシが現れる。

インフェルニティ・ネクロマンサー

ATK0

インフェルニティ・ビートル

ATK1200

「インフェルニティ・ビートルの効果により、自身をリリースし、同名モンスターを可能な限り特殊召喚する！来い、インフェルニティ・ビートル×2！インフェルニティ・ネクロマンサーの効果により、インフェルニティ・デーモンを特殊召喚！」
オレンジ色の髪を生やした、青い装飾の入った服を着た悪魔が現れる。

インフェルニティ・デーモン

ATK1800

「インフェルニティ・デーモンの効果でインフェルニティ・ガンを手札に加わる。レベル4インフェルニティ・デーモンとレベル3インフェルニティ・ネクロマンサーにレベル2インフェルニティ・ビートルをチューニング！現れる、氷結界の龍トリシューラ！」
三首の氷で出来た龍が現れる。

氷結界の龍トリシューラ

ATK2700

「効果により、墓地のアクア・ジェットとフィールドのドリル・バスターニカルと、手札1枚を除外する！」

「何イ！」

「永続魔法発動！インフェルニティ・ガン！効果によりインフェルニティ・ガンを墓地に送り、インフェルニティ・リベンジャーとインフェルニティ・ネクロマンサーを特殊召喚！」

骸骨をかぶったような悪魔と、二丁の拳銃を持った、テングロンハットをかぶったモンスターが現れる。

インフェルニティ・ネクロマンサー
DEF2000

インフェルニティ・ネクロマンサー
ATK0

「デーモンを特殊召喚しガンをサーチ！ガンを発動する。レベル4
インフェルニティ・デーモンとレベル3インフェルニティ・ネクロ
マンサーにレベル1インフェルニティ・リベンジャーをチューニン
グ！現れろ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

赤い悪魔のような龍が現れる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン
ATK3000

「インフェルニティ・ガンにより、ビートル×2を特殊召喚する！
レベル8レッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル2インフェルニテ
ィ・ビートルをダブルチューニング！現れろ、スカーレット・ノヴ
ァ・ドラゴン！」

赤い悪魔のような龍型のモンスターが現れる。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン
ATK3500

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは墓地のチューナーの枚数×5
00ポイント攻撃力がアップする！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

ATK3500↓5000

「シャークにダイレクトアタックしろ、スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは身体に炎を纏い、シャークに近づく。

「バーニング・ソウル！」

シャーク

LP4000↓0

Side裕也

「まずは一勝！ガンガン行こうぜ、遊馬！」

「ああ！」

「くっ・・・少し油断した・・・まだ明日がある。覚えてろ！」
行っちゃったな・・・。

「遊馬、俺の家に来てデッキを一緒に調整しないか？」

「良いぜ！行こう！」

ふふふ・・・遊馬のデッキを良い感じに魔改造してライバルになれるようにしてやろう！

SideEnd

遊馬魔改造計画（前書き）

裕也・・・お前も康太と同じ人間のクズだったか・・・。

遊馬魔改造計画

S i d e 裕也

今はシャアク基シャークとのデュエルが終わり、遊馬と家に帰る最中だ。

「・・・パック買いたいな」

新しい俺の見たこと無いカードが当たるかもしれないしな！

「あそこのコンビニに売ってるから買いに行こうぜ！」

そう言って遊馬はコンビニに向かって走り出す。

「ああ！」

楽しみだなあ・・・ワクワクする！

・・・数分後・・・

「ジェムナイト・パール9枚当たるとか嫌がらせかー！
10パック買ってだぜ？」

ヒドウン・アーセナルのようなパックを買ったらこれだよ・・・。
ちなみに当たったカードはダイガスタ・フェニクス1枚、リチュア・
ビースト5枚、シャドウ・リチュア10枚、ガスタ・ガルド5枚、
ガスタの巫女ウィンダ10枚、イビリチュア・ソウルオーガ10枚
だ。

「被ってるな、かなり。でもエクシーズモンスターはうらやましい
な！」

「ジェムナイト・パールは3枚あげるよ。まあ当たり方は酷いよね」
つかイビリチュア・ソウルオーガとリチュア・ビーストがノーマ
ルって・・・リチュアはこの世界だと安く組めそうだな。

「遊馬、速く俺の家に行こうぜ！」

「ああ！」

・・・数分後・・・

「裕也の家・・・でかいな」

一応、元の世界だと不動産が実家なんだよな・・・まあ別にう関係ないけどな・・・。

「まあな・・・ちなみに親はいないから」

なんせ一人暮らしだからな、この世界では。

「おじゃまします！」

「気にすんな」

「ここでもかっつとビングだ、俺え！」

俺の家にある、20段の階段に向かって遊馬は走り出した・・・。

「えっ、あっ、ちよっと、待て！暴れるな！騒ぐな！近所迷惑だから！」

あっ・・・あいつ、跳びやがった。

「うおおおおおおお！」

15段目で逆立ちの要領で手をつけたな・・・。

「行ける！行くぞ、かっつとビングだ、俺え！」

えっ・・・遊馬、何で手で階段を上るの？

「上りきったぞ！」

「騒ぐなって言っただろうが！馬鹿！」

「ごめん・・・でも」

「でもない！一言、【ごめん】で良いだろうが！」

「ごめん」

「わかったなら良い。とりあえずデッキを貸してくれ」

「ああ」

俺は遊馬のデッキを手にとって、効果を読む。

これは酷いな・・・。

「ジェムナイト・パールをあげるよ。ガガガ・マジシャンの効果を活かす為にいるだろ？しかし・・・ダブル・アップ・チャンスは要

らないだろ・・・」

「そうか？強いぞ？」

「事故の原因になる。抜いておけ。さっき当たってたカゲトカゲを3枚入れておいたら？」

運良いよな、コイツ・・・。

カゲトカゲは案外強いし・・・。

「レベル制限B地区とか入れてみるか？ズババ・ナイトと相性良いぞ？」

上級モンスターを切り殺すズババ・ナイト・・・なんか嫌だな。

「良いな、それ！他にはなんかない？」

「・・・くず鉄のかかしとかどうだ？使いやすいぞ？他にもこのカードとかどうだ？」

コイツの効果は面白いぞ？

使うタイミングは限られてるが中々強いし。

「良いな！ありがとうな！」

「他にもゴブリン・ドバークは3枚いるだろ。後は・・・増援とズババ・ナイトが要るな」

無論、ランク4のエクシーズ祭になるだろうな。

ワンキルも夢じゃないな。

「シャークに勝たなきゃならんのだし、ドリル・バーニカルには気をつける。アクア・ジェットでワンキルされるかもしれない」

実際攻撃力があと700高かったら負けていた・・・。

負けられないデュエルなのにな・・・。

「わかってるよ。裕也と父ちゃんのデッキなんだしな！」

良い返事だな。

「頑張れよ！俺は応援してるぞ」

「ありがとうな、裕也」

「気にするな。友達の為だからな」

友達のデッキを魔改造して俺のライバルになりうる人物を育てる・・・最高の計画だろ？

S
i
d
e
E
n
d

遊馬とシャーク

Side 裕也

「怖じけつかなかったのは褒めてやるが、尻尾を巻いて逃げりやお前のデッキだけは助かった物を」

シャークの奴勝つ気満々だな。

まあ勝てないと思うが。

「お前みたいな奴から逃げるくらいならデュエリストを辞めた方がマシだぜ！」

遊馬・・・そこまで言うか？

言い過ぎだ。

・・・多分。

「やるっきゃねえ、かつとビングだ、俺！デュエルディスク、セツト！D・ゲイザーセット！デュエルターゲット、ロックオン！」
遊馬め・・・騒ぎすぎだ。

『ARビジョンリンク完了』

機械的な女性の声が聞こえたな。

「デュエル！」

始まったな。

楽しませてもらうか。

「頑張れ、遊馬！」

小鳥がそう言うが・・・腋がまる見えだ。

女の子なら気をつけろよ・・・。

つか俺はロリコンじゃないがな。

「行くぜ、俺のターンドロ！ズババナイトを召喚！」

金色の鎧を着た、双剣を持った戦士が現れたが・・・攻撃力が1600と低い。

遊馬は大丈夫なのか？

「先攻は最初のターン攻撃できないんだよね？」
当たり前だ馬鹿。

ルールくらい把握しとけ。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

まあ定石かな？

遊馬のフィールドを整理しておく、こうなるな。

遊馬

手札 4枚

モンスター ズババナイト

魔法罫 リバースカード 1枚

「俺のターンドロ―！」髭男爵のひぐち君のひぐちカッターみたいなポーズでドロ―してるがカッコイイとも思ってるのか？
ダサいぞ。

つーかひぐち君って懐かしいな。

「俺はビッグ・ジョーズを召喚！」

一部が機械化された鮫が現れたな・・・。

レベル3のモンスターで攻撃力1800は高いな・・・。

まあ康太ならレベル1のモンスターの攻撃力を7000くらいまで上げれるだろうな。

使うのはワイトキングかカオス・ネクロマンサー辺りだろうな。

「攻撃力1800!？」

遊馬、驚きすぎだ。

「ズババナイトの攻撃力は1600ビッグ・ジョーズは1800攻撃表示同士でバトルすれば攻撃力が少ない方が破壊され数値の差だけダメージをくらう」

まあ当たり前だな。

「ズババナイトより強いモンスターが手札にあったのか！」
それくらい想定しとけ。

「その程度の雑魚は守備表示で出すんだな」

オネストとか突進とかカルートとかがあれば別だぞ？

まあ攻撃を誘うプレイングが有りな時もあるがな。

「それでも、それ以上の攻撃力のモンスターを持っていても無意味だったがな。俺は魔法カード、アクア・ジェットを発動！」

出たな、前回の意味最強カード！

「ビッグ・ジョーズの攻撃力を1000ポイントアップする！」

エンジンみたいなのがビッグ・ジョーズについたが似合っていないな。

ビッグ・ジョーズの攻撃力は2800・・・ちよつとまずいか？

「今回も出た」

「シャークさんのマジックコンボだ！」これ、コンボじゃないだろ・・・。

つーかマジックコンボ好きだなオイ！

「バトルだ、行けビッグ・ジョーズ！ビッグマウス」

上に飛び上がってズバナイトに突撃したな。

そのあとズバナイトは噛み付かれて光の粒子のようになり消えた。

「ズババ！しかし罨発動！デイメンジョン・ウォール！」

ビッグ・ジョーズがシャークに当たりに行ったな・・・あれ？
自爆じゃね？

シャーク

LP4000↓2800

「先制攻撃は遊馬がしたがこれからはどうなるかな？ズバナイトは破壊されたしな」

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

シャーク

手札 3枚

モンスター ビッグ・ジョーズ

魔法罫 リバースカード1枚

「俺のターンドロ―！俺はモンスターをセットしてターンエンドだ」
それも一種の選択だが……。
戦えるのか？

遊馬

手札 4枚

モンスター セットモンスター 1枚

「俺のターンドロ―。俺はスカル・クラーケンを召喚」
黒い海月のようなモンスターが現れた。

「リバースカードも無し、攻撃力2800のモンスターも出され同じレベルのモンスターが2体。もう諦めたらどうだ？」

制圧してないのにどうしてそんなこと言うかな？

「ふざけるな！俺はそんな奴じゃねえ！いくら失敗したって、いくら笑われたって、今まで俺がかつとび続けてきたのは、俺は俺を信じてきたからだ！」

良く言った。

自身でそんな答えを見つけただけでも遊馬はすごいと思う。

「俺のかつとビングはまだ、まだ終わってねえ！」

首から提げてる首飾りの紐を遊馬は引っ張って切った。

その瞬間、鍵らしき首飾りは光りだした。

光がおさまると、遊馬は尻餅をついていた。

「な、何だ今の？夢？はっ」

遊馬、お前に何が起きたんだ？

その後、遊馬の首には紐が切れたはずの首飾りが修復されて提げられていた。

遊馬はそれを手に取った。

「いや、どうなってんだ？」

意味不明なんだが？

「何だ？力がみなぎる。うおお。うおおおお！俺はレベル3ビッグ・ジョーズとスカル・クラークンをオーバーレイ、2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！来い、NO17 リバイス・ドラゴン！」

紫色の体の6の青い羽を持つドラゴンが現れた。

NO17 リバイス・ドラゴンの攻撃力は2000・・・低いな。

「ナンバーズ！？」

「あれは俺の時に呼んだモンスターじゃない」

戦略を変えてくる可能性を考えろ。

「じゃあ何なの？」

他人に聞くな。

「わからねえ。ナンバーズなんて聞いたことねえし」

お前の事は聞いてないぞ。

「リバイス・ドラゴンの効果発動、1ターンに一度オーバーレイユニットを使うことでリバイス・ドラゴンの攻撃力は500ポイントアップする」

ビッグ・ジョーズのままの方が強くないか？

「何！？」

驚くところか？

リバイス・ドラゴンがリバイス・ドラゴンの周りに浮いていた光の球を食べたな。

「リバイス・ドラゴン、バイスストリーム」

オイ、モンスターが1体でセットモンスターしかないがどのモンスターを攻撃するか選べよ。

「セットモンスターはゴゴゴゴーレムだ。破壊されない！」

よかった・・・助かった。

つかイラストは青いのに何で茶色いんだろう？

「くっ・・・破壊できないか」

しかし守ってばかりじゃ勝てないぞ？
どうするんだろう？

『勝つぞ』

・・・あれは何者だ？

「えー！はっ、誰だお前！」

当たり前の反応だな。

だってどう見てもN ティンクルモスだしな・・・。

S i d e E n d

決着、遊馬VSシャーク（前書き）

やっと書けました。

言い訳はしません。

遅くなって申し訳ありませんでした！

決着、遊馬VSシャーク

「何言ってんだ？コイツ」

遊馬はそう呟きながらN ティンクルモス（仮）が居る方を見ている。

「どうしたの、遊馬？」

小鳥が遊馬に話しかけた。

俺と遊馬には見えてるのになんでコイツ等は見えてないんだ？

「何独り言言ってんだ？」

デブ男がそう言った。

俺からしたら「何言ってんだ」はこっちの台詞だよ！

「お前達にはコイツが見えないのかよ？」

「え？」

小鳥はそう呟いた。

「ほらここ、ここ！」

遊馬はティンクルモス（仮）を指差しながらそう言った。

「確かに居るな。N ティンクルモスに似た奴がな」

ティンクルモスにそっくりだよな・・・。

「いないわよ？」

「え？マジ！？」

康太と一緒にホラーは苦手なんだ！

勘弁してくれ！

「コイツ、まさかビビリすぎて変になっちゃったんじゃない？」

デブ男、失礼すぎないか？

「ビビる必要は無い。あのデッキは俺が改造した。遊馬がちゃんと使えたら確実にシャークに勝てる」

遊馬の今のデッキは低レベルモンスターを中心に魔法の筒やバイバイダメージ、ディメンジョン・ウォールで相手にダメージを与える

合気道みたいなデツキだ。

さらにエクシーズ召喚で勝てないモンスターを潰すという作戦2まで付いているテクニカルな物に仕上がった。

「確かに先制ダメージは与えたけど・・・」

「いくら裕也が強化したデツキでも、遊馬じゃシャークに勝てるかどうか・・・」

コイツ等・・・大切な事が頭から抜けてるな。

「勝てない訳が無いデュエルなんて無いし、どこかに突破できる可能性はきつとある。それを信じて戦うのがデュエリストだ」

俺の持論だがな。

康太は準決勝で弾圧にライオウ3枚という絶望的な状況を氷結界で突破して全国大会の一步手前まで行ったからな。

まあ次の俺とのデュエルでスカーレット×3でとどめを刺したがな。俺達のランクを著すところだな。

俺＞優君≧康太＞＞＞超えられない壁＞＞＞他の友人だったな。

話が逸れたな。

遊馬とシャークのデュエルの状況をおさらいすると・・・。

シャーク

LP 2800

手札 3枚

モンスター No17 リバイス・ドラゴン【残りオーバーレイユニット1つ】

魔法罫 リバースカード1枚

遊馬

LP 4000

手札 4枚

モンスター　ゴゴゴゴレム

ハンドアドバンテージとライフアドバンテージでは遊馬が、ボードアドバンテージではシャークが優勢だ。

「まさかお前、幽霊だろ！」

「「幽霊!?!」」

止めろ、止めてくれ!

オカルトは苦手なんだ!

『幽霊とはどんな効果だ、いつ発動する?』

「はぁ? 何言ってるんだよ、お前?」

よかった・・・ティンクルモス(仮)は幽霊じゃないらしい。

『私はどうやら記憶を失ったらしい。おそらくこの世界に来る時、なにかの衝撃で飛び散ったと推測できる』

記憶は飛び散らないよ?

有り得ないって!

「きーおーくー喪失だと? つーかそもそも記憶って飛び散るのか? あー駄目だ。俺、おかしくなってる。なんでこんな大事なデュエルの時に?」

まあな。

しかし有り得ない訳じゃないがな。

『落ち着け』

「お前のせいだろ！」

即興で漫才が完成してるし・・・。

「大丈夫かな・・・遊馬。ずっとぶつぶつ言ってるけど・・・」
命が有りゃ大丈夫だろうし、俺も見えてるんだぞ?

「やっぱ無茶だったんだ。シャークに戦いを挑むなんて」

無茶か?

ライフ削ったしまだまだ逆転だってできる!

「デブ男君まで弱気にならないでよ! このデュエルには貴方と遊馬

と裕也のデッキが懸かってるのよ！シャークなんか奪われてたまるもんですか。先に裕也が一勝したのに」

予備のカードは有るが康太との思い出を取られる訳にはいかねえ。遊馬には勝ってもらわなきゃな。

「しっかりしなさいよ、遊馬ー！」

小鳥はそう叫んだ。

耳が痛い・・・。

「しっかりしてるよ！」

遊馬はそう小鳥に返した。

『No17 リバイス・ドラゴン・・・』

ティンクルモス（仮）はそう呟いた。

「今なら誰にも負ける気がしねえ。お前等のデッキを奪ってやる！カードを1枚伏せてターンエンドだ」

シャークはそう言った。

まあ倒し方はいくらでも見つかるがな。

シャークのフィールドは・・・リバーを伏せたただけだからあんまり変わらないや。

『ナンバーズ。奴に関する重要な記憶が有ったはず。私の本能がこのデュエルに勝てと言っている』

本能？

マジか？

「デュエルって、お前デュエル知ってるの？」

遊馬はティンクルモスにそう聞いた。

『そう。私はデュエリスト！』

「デュエリストの幽霊！」

ティンクルモスが答えると遊馬は驚いたように返事をした。

「「デュエリストの幽霊！？」」

デブ男と小鳥はそう叫んだ。

『私はデュエリスト！私のターン！』

ティンクルモスはそう言って両腕を広げた。

「俺のターンだって！俺のターンドロー！」

遊馬は普通にドローした。

『私はガンバラナイトを召喚！』

ティンクルモスはそう言った。

しかし・・・

「俺のデュエルに口出すな！・・・まあそうするけど。俺はガンバラナイトを召喚！」

両腕に盾を付けたアメフト選手のようなモンスターが現れる。

ガンバラナイト

ATKO

「遊馬！どうして攻撃表示で？ガンバラナイトの攻撃力は0だぞ！」
デブ男は遊馬に問い掛けた。

「俺にだって考えは有るんだ！」

遊馬はそう言い返す。

『ナンバーズ』

ティンクルモスはそう呟いた。

「あっ？」

遊馬はそう聞き返す。

『思い出した。ナンバーズとは私の記憶のピース。ナンバーズはモンスターエクシーズでも特別なカード。この世界のカードでは倒す事はできない。そしてナンバーズ同士のデュエルでは勝者は敗者のナンバーズを吸収する』

ティンクルモスはそう言い放った。

「どういう事だ？」

遊馬は疑問をティンクルモスに投げ掛ける。

『このデュエルに勝たなければ私はこの世界から消滅する。私はこのデュエルに勝たなければならない』

「最初から俺は勝つつもりだ！」

遊馬はそう言った。

『レベル4ガンバラナイトとゴゴゴゴーレムをオーバーレイしろ』
ティンクルモスは遊馬に言った。

「ジェムナイトパールを喚ぶのか？」

遊馬はティンクルモスに問い返す。

『違う。エクストラデッキを見ろ』

そう言われた後、遊馬はエクストラデッキを取り出してみる。

「何だこのモンスターエクシーズ？」

それは本来、遊馬のエクストラデッキに存在しないカードだった。

「テキストが読めない」

よくわからない言語で全ての字がかかれた4枚目のエクストラデッキのカードを見て遊馬は言った。

『私は読める。No. 39 希望皇ホープ』

ティンクルモスは遊馬に向かってそう言い放った。

「コイツ、ナンバーズか!？」

遊馬は正面を向いたまま聞いた。

『そうだ。君に与えられた力だ』

ティンクルモスはこの問いに対してそう答える。

「かっとビングだ、俺! レベル4ゴゴゴゴーレムとガンバラナイトをオーバーレイ! 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築! エクシーズ召喚! 『現れろ! No. 39 希望皇ホープ!』」
白い渦に黒い色が混ざり、その中に2つの球が入っていく。

その渦が光を放つといつのまにか渦は消え、羽のはえた白い騎士のようなモンスターが現れていた。

No. 39 希望皇ホープ

ATK2500

「『行け希望皇ホープ、リバイス・ドラゴンを攻撃！ホープ・剣・スラッシュ！』」

ホープが腰の剣を抜くと剣が飛んでいった。

その後、剣はホープの手に戻ってきた。

そしてその剣でリバイス・ドラゴンに切り掛かった。

「罨発動、ゼウス・ブレス！このカードは、相手モンスターの攻撃を無効にする。更に、自分フィールドに水属性モンスターがいる時、800ポイントのダメージを相手に与える」

シャークがリバイスカードを発動したら、リバイスカードから巨人が現れ、水が噴き出した。

そしてその水がホープを押し返し、遊馬を巻き込んで行った。

遊馬

LP4000↓3200

「・・・初ダメージだな。まあ不意打ちに近いしダメージが少ないから問題ないが。とりあえずライフアドバンテージに差がなくなってきたのはまずい。押し切られて負けるかもしれない」

俺は正論を述べてるはずだ。

今、ホープを突破される可能性が高い。

ホープ達ナンバーズには効果破壊の耐性は無い。

他にもリバイス・ドラゴンの効果で攻撃力が上げられた場合、500ポイント上回られやっぱり戦闘破壊される。

つまり、ホープに防御の効果があるか、遊馬のリバイスカードに防御系のカードがあるか、このどちらかが無ければナンバーズを失って遊馬はかなり不利になる。

「相打ち狙いの自爆特攻なんて狙うなよ、遊馬」

デブ男がそう言った。

「いや、遊馬の判断は正しい。まずリバイス・ドラゴンを倒せる可能性が有ったのは攻撃力を上げるカードか除去できるカードを引く

以外ではこのターンに相打ちで倒すしか無かった。しかしその機会を今失ってしまった」

俺は今の状況を説明する。

「じゃあ遊馬は負けるの？」

小鳥が聞き返してきた。

「まだだ。ホープが攻撃や破壊から自身を守る効果か、戦闘を無効にする効果の場合か、リバーズカードにリバイス・ドラゴンの攻撃を防げるカードかリバイス・ドラゴンを破壊できるカードかホープの攻撃力を上げるカードが有れば助かる」

ホープさえ守り抜いておけば遊馬のデッキだと、破天荒な風とか、突進とか燃える闘志とかも有るしな。

遊馬

LP 3200

手札 4枚

モンスター No. 39 希望皇ホープ（オーバーレイユニット残り2つ）

「ナンバーズを喚ぼうと、お前は俺の敵じゃない。俺のターンドロ！手札から魔法カード浮上を発動！このカードは墓地の水属性モンスターを特殊召喚する。蘇れ、ビッグ・ジョーズ」

先程エクシーズ素材にされ、墓地に送られたビッグ・ジョーズが蘇ったな。

せいぜい守備力300だ。

壁にすらならない。

アドバンス召喚のリリースやエクシーズ素材、シンクロ素材にする位しか役に立たないな。

他にも死角からの一撃のためとかも有り得るな。

「更に俺はビッグ・ジョーズをリリースして、ジョーズマンをアド

バンス召喚！」

体中に鮫の口が付いたモンスターが現れた。

ジョーズマン

ATK2900

上級モンスターでこの攻撃力は高いな。

「アドバンス召喚？」

小鳥はデュエルしないから知らなくても仕方ないか。

「モンスターをリリースして上級レベルのモンスターを喚ぶ召喚方法さ」

デブ男説明乙

ああ・・・帰ってけいおんの漫画読むか、DVD見るか、ゲームするか、ネットサーフィンしたい・・・。

「リバイス・ドラゴンの効果発動！オーバーレイユニットを取り除き攻撃力を500ポイントアップさせる！リバイス・ドラゴンでホープを攻撃！」

リバイス・ドラゴンが周りの建物とかを壊しながらホープに突撃しようとする。

「うわあああああ、ホープの効果は何か無いのかよ？」

遊馬は瓦礫を避けながらティンクルモスに問いかける。

『ホープの効果はオーバーレイユニットを使う事でモンスターの攻撃を無効にする』

どうやら遊馬は助かったらしい。

「それを早く言えって」

仕方ないと思う。

聞かれてないし。

「俺はホープの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、リバイス・ドラゴンの攻撃を無効にする！」

ホープの周りの光の球がホープの胸のクリスタルのような物に入っ

た。

その瞬間リバイス・ドラゴンがブレスのような攻撃を放ち、ホープを攻撃した。

するとホープの背中の羽のような物が開き、マントのように広がり盾になった。

「『ムーンバリア!』」

ティンクルモスと遊馬の声がハモリながら響く。

ホープのマントのような物はリバイス・ドラゴンのブレスを受け止め防いだ。

「それがホープの効果か。だが攻撃を防いだって俺のモンスターを倒せなきゃ勝てないぜ」

シャークは挑発のように行った。

「奴のモンスターを倒す」

遊馬はそう呟いた。

「お前が使えるオーバーレイユニットは後一つ。ナンバーズはナンバーズ以外の攻撃では破壊されないがダメージは有効。ダメージを避けたけりゃ残りのオーバーレイユニットを使いな。行け、ジョーズマン、ホープを攻撃」

シャークはそう指示する。

ここでダメージを受けてもライフは2800残る。

ライフが並ぶのは痛いけど仕方ない。

『ここは防ぐな!』

ティンクルモスは遊馬にそう指示する。

「わかってる!」

遊馬

LP3200↓2800

「諦めるんだな。次のターンにはホープのオーバーレイユニットも無くなる。防ぐ手立ては無くなる」

シャークはそう言って遊馬を諦めさせようとする。

「まだだ、まだ諦めねえ！」

遊馬はシャークに言い返してみせた。

「お前に残されたのは後せいぜい2ターンだぞ。どうしてデュエルを諦めない！？」

シャークは声を張り上げて遊馬に問いかける。

「お前こそどうしてそんなに俺を諦めさせたいんだよ！？」

遊馬はそれに対抗してか声を張り上げてシャークに聞き返す。

「そんな風に言うって事は自分で何かを諦めたんじゃないのかよ！？」

シャークはそれを聞いて衝撃を受けたらしく、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしている。

「大切な何かを諦めたんじゃないのか！？」

遊馬は更に声を張り上げシャークに聞く。

「諦めなきゃ、何時だったかってべるんだよ！それをお前に見せてやる！」

遊馬はそう宣言した。

『まだ逆転の手が有ると言うのか？』

ティンクルモスは諦めてきたらしい。

「あるさ！俺のデッキに倒せるコンボが！」

遊馬は何処からか布のような物を取り出した。

「ちょっと何してるの、遊馬？」

小鳥は何かに驚いたのか遊馬に聞く。

「これは俺の勝負飯、デュエル飯だ！」

遊馬は丸い巨大な丸いおにぎりを食べてそう言った。

その後、俺は手を拭くための除菌シートを遊馬に渡す。

遊馬は手を拭いてから言った。

「充電完了、俺のターン！俺が奴に勝てるとしたらここしかない！
かっとビングだ俺！ドロー！」

遊馬はバク転してから逆立ちし、脚を回し、ジャンプして尻餅をつ

いた。

「来た！魔法カード、鬼神の連撃を発動しホープのオーバーレイユニットを全て取り除き、攻撃を2回行えるようにする！更に装備魔法、魔導師の力をホープに装備！カードを1枚伏せる！破天荒な風を発動し攻撃力を1000ポイントアップ！」

No. 39 希望皇ホープ

ATK 2500 ↓ 4500

「ホープでリバイス・ドラゴンを攻撃！ホープ・剣・スラッシュ！さっきと同じ要領でホープはリバイス・ドラゴンを攻撃した。」

シャーク

LP 2800 ↓ 1300

「今度はジョーズマンを攻撃だ！」

ホープは剣をジョーズマンに向けた。

そして一気にジョーズマンを切り裂いてみせた。

シャーク

LP 1300 ↓ 0

「勝ったのか？」

遊馬は呟く。

「遊馬が」

「勝った？」

デブ男と小鳥がバラバラに言った。

「勝った、俺、シャークに勝ったんだ！勝ったビング！」

遊馬は飛び上がり喜んだ。

「「あんな奴に負けるなんておしまいだぜシャーク！」」

舎弟2人は逃げるように帰って行った。

「よく、破天荒な風を温存してたな」

「だって、後で使ってダメージを叩き込んだ方がダメージを与えられるし、リバイス・ドラゴンさえ倒せば勝率も上がったからな！そして後で攻撃力が高いモンスターが出てきても倒せるし！」
遊馬は心底嬉しそうに言っていた。

「じゃあ俺、帰るよ。ちよつと疲れたからさ」

「じゃあな！」

次の日、デブ男と遊馬は仲良くデュエルしていた。
プレイングは良くなっていたが、やっぱり負けていた。

決着、遊馬VSシャーク（後書き）

この小説内では遊馬のプレイングセンスは現実では通用しませんがアニメの中ならある程度通用する位だと思っています。ご了承ください。

裕也の設定（前書き）

裕也の設定です。

いろいろやり過ぎた感じが・・・

裕也の設定

不動裕也

転成前17歳↓転成後12歳

誕生日 5月23日

設定

少しお調子者な所が有り、精神年齢は低め。

転成前の親友、高嶺康太とは家族ぐるみの付き合いがあった。

漫才コンビでいうボケのタイプのため、康太がストッパーになっていた。

遊馬のかつとビングを止めるより、煽ってもっとやらせようとするタイプ。

自他共に認めるオタクでけいおんやIS、とある魔術の禁書目録等が好み。

オタク趣味さえ無ければイケメンなのに・・・と康太に常々言われていた。

本人曰くアニメやゲームが無い世界なら死んだ方がマシとのこと。

同人誌確保の為に身体を鍛えていた。

握力は右100Kg左95Kg

デュエルの実力としてはネタデッキ、チーム5D'sというチーム5D'sのメンバーが使ったカードのみのデッキで全国大会で準優勝するレベル。

成績は下の下。

康太曰く壊滅寸前、中学の勉強からやり直すべきだそう。

補習の常連として教師達に有名だった。

土下座をしてまで康太に勉強を教わり、何とか進級したという過去がある。

料理の腕は壊滅的。

自覚しているため、料理は絶対にしない。

家族構成は父親、母親のみ。

一人っ子なので過保護にされていた。

父親はデュエルの相手をよくしてくれており、相談相手だった。母親は優しくして自分を心から愛してくれていたため好きだった。飽くまで親以上の感情は無く、マザコン等ではなかった。

好きな物等

デュエル 康太の料理 清楚な女

嫌いな物等

厭味な奴 ケバい女 死

最近、小鳥の腋を見て股間のアレが立ったため、ロリコンなのでは無いかと心配している。

使用デッキ

チーム5D、Sデッキ
インフェルニティ

コンピューターウイルス事件!?(前書き)

すごく中途半端な気がしますが、仕方なかったんです・・・。
すいませんでした!

コンピューターウイルス事件!?

夕方の街の中、俺達は帰路について、帰っている。

町並みはあまり転生前の景色と変わらない。

学園都市に居そうな掃除ロボットや、動く円のような自販機以外はな。

「で？お前ずっと俺について来る気かよ？」

遊馬がティンクルモスに尋ねる。

もちろん俺には正月にカードを買った時付いてきたファイルがあったからわかる。

コイツはアストラル。

つい昨日思い出したんだよな。

『離れたくとも離れられないのだ。私の記憶が完全に戻れば、その方法もわかるかもしれない』

おそらくナンバーズを全て集める事だろうな。

遊馬のデッキを見た時、ナンバーズのカードは無かった。

つまり遊馬にアストラルが憑いた時に手に入ったと推測できる。」「

お前の記憶ってどうやってたら戻るんだよ？」

『ナンバーズを集める事だ』

やはりか。

まあナンバーズはナンバーズでなければ戦闘では倒せないという条件さえ無ければ俺も戦い易かっただろうな。

「ナンバーズ？まさかそれを俺にやれって言うつもりじゃないだろうな！」

遊馬は少し怒っているみたいだ・・・。

仕方ないかもな。

シャークはこの世界ではトップランクだったみたいだしな。

そんな奴とデュエルさせられたという事は、もっと強い奴と戦わなきゃならない可能性もあるという事だ

辛いな・・・。

俺と中学生、いやもっと差があるかもしれないし・・・。

「遊馬の奴、また一人で喋ってるぜ？」

「本当に居るのかしら？デュエリストの幽霊」

今喋ったのはデブ男と小鳥だ。

俺はデブ男が嫌いだ。

理由？

説明に回った時、プレイングミスをしていないのにプレイングミスをしたと言うし、友人である遊馬を笑ってからかい、馬鹿にする。

自分が弱いという自覚の無い馬鹿はこれだから嫌いだ。

馬鹿である俺が言う事じゃないと思うがな。

この世界のデュエルは酷い。

ワイトやはにわやらの弱小バニラを攻撃表示で召喚とかありえないし、ワンキルが楽にできる。

しかも攻撃3000を突破しただけで驚くし。

頭が悪い俺には考えるのは向かないな・・・。

「絶対に絶対に嫌だからな。だから着いてくんない！」

遊馬はアストラルにそう言って歩いていく。

「俺、あっちだから」

「じゃあね、裕也」

俺はここから先、一人別方向だから、一人で帰る為に別れた。

「うわあああああああ！」

女性の叫び声が聞こえたが、聞かなかった事にして俺は帰った。

ちなみに前会った遊馬の姉貴の声に近かったが知らん！

今晚の飯はどうしようかな？

小鳥に簡単な料理を教えてもらい、作ってみたが全く上手くできん。仕方ない、米炊いて納豆か鮭フレークかインスタントラーメンでも食べよう。

・・・次の日・・・

「・・・むにゃむにゃ・・・」

「だったら先生!」

徹夜でゲームしてたからゆっくり居眠りしようと思って居眠りしていたらいきなりの遊馬の叫び声で目覚めてしまった。

「今日はデュエル大会にしようぜ!」

遊馬は元気よくそう言うが、許可される訳・・・。

「うーん、そうだな・・・そうしょっか」

許可されちゃったよ!

しかもあっさり、軽いノリで!

「やった!今日は一日中かっとビングだぜ!」

『やった!右京先生!』

色々な声が聞こえるが・・・寝よう。

・・・数分後・・・

「んじゃ、スカレ3体、攻撃力8000でダイレクトアタックで終わりだ」

暫くしてからデュエルを挑まれたから全力でスカレを並べた。

攻撃力8000が3体並んだんだ、絶望も半端じゃないはずだ。ちなみに決勝戦で相手は委員長だ。

バグマンデッキとか、使いづらいだろうに。

しかもバニラのあのバグマンだぜ?

効果モンスターのバグマンXとかならまだ納得できるんだが・・・。

・・・放課後・・・

図書室で今、新約とある魔術の禁書目録を読んでいる。

暇潰しだ。

そろそろ閉館時間だな。

荷物まとめよう。

「あれはデータステック？」

小鳥の声が聞こえたが、間違いだと信じ荷物をまとめる作業を続ける。

「あっ、うわっ、わあああ」

前の席に座っていた委員長がいきなり叫んだ。

面倒だからスルーしよう。

「まさかこれって。うわあああ」

「捕まえた！事件の犯人はお前だったんだな？」

委員長の肩を遊馬が掴んだ。

「五月蠅い……って遊馬か？なら仕方ない」

「すいません……って僕は犯人じゃありません。利用されたんです」

委員長はそう言って作業を始める。

「嘘つけ！俺はウイルスをまく瞬間を見た。何してんだ？」

遊馬は委員長の言葉を否定した後、作業の内容を聞く。

「犯人を追尾しているんです。このマシンに外部からアクセスした場所を探し出せば、きっとそこに犯人が。くそーっ、ここから調べれば犯人が分かるってデータファイルが届いて僕はそれがウイルス爆弾を起動させる、インストールファイルとは知らずに町にウイルス爆弾をまいてしまったんです！」

説明お疲れさん。

しかし……。

「他人から届いたファイルを適当に開くなよ……。しかも図書室で……。他人への迷惑を考えろよ」

思っていた事をつい言ってしまった。

「裕也君に注意されるとは……って見つけた！」

そう委員長が言ってから俺達はその場所に向かって走り出す。

道中で遊馬が誰かに電話していたが気にしないでおう。

「あそこです！犯人はあの建設中のタワーの中です！」

走って着いた場所は近未来的な町にありそうに無い黒ずんだ灰色の
ような色の建設中のタワーだった。

「本当にこの中に犯人がいるのか？」

遊馬は辺りを見渡しながら言っている。

いそうな気はするが・・・。

「はい、確かにここです」

何故犯人が逃げた事を考えないんだ？

馬鹿なの、死ぬの？

「驚いたな、色々とくつついて来たか」

黄色い椅子の前に立っている、喋った奴は、眼鏡をかけた茶髪の優
男だった。

「右京先生。なんで先生がここに？」

犯人か呼び出されたかのどちらかだ。

「えっ、ええー！それってとどのつまり右京先生が犯人って事です
か？」

委員長の発言とほぼ同時に、周りのモニターがいきなりつきだした。

「まあそういう事だ」

バレバレな気しかしい・・・。

「嘘だろ！？先生！」

「委員長がここを突き止めるのは想定済みだ」

遊馬の発言を無視し、先生が話す。

「とどのつまり、これも罠」

委員長、とどのつまり、とどのつまりって、何度も五月蠅いんだよ！
あーいらいらする。

「君がまいてくれたウイルス爆弾はあと30分で作動する」

ウイルス爆弾とか・・・って家のパソコンが、テレビが、電話が！

「さっさと止めるなり、何なりとしろ！電話とかちよっと18歳未
満が見ちゃいけないパソコンのファイルとかが壊れたら困るんだ！

条件次第ではのむからさっさと解除してくれ」

ちなみに全て事実だ。

「ならデュエルだ！君が、裕也が勝てばウイルス爆弾を止めてやる！」

こいつ馬鹿だろ……。

『あれはナンバーズの刻印』

「うわぁ！お前、どっか行ったんじゃないの？」

いきなり漫才を始めるアストラルと遊馬。

アストラルが見えなかったらかなりシニールだろうな。

「五月蠅い！……まあ良い。遊馬、ナンバーズを貸してくれ！」

とりあえず相手がナンバーズを持っているからこっちもナンバーズがないと勝てない！

「良いぜ」

遊馬がホープと何か1枚を手渡してくれた……これは！

「行くぜ」

「デュエル！」

ある意味ピンチ！ある意味ラッキー？（前書き）

何と言うか・・・やり過ぎたかな・・・？

後書きで何かをやりたいのですが、何をすればいいのかわかりません。

アドバイスをください・・・。

ある意味ピンチ！ある意味ラッキー？

「先生！これ、悪ふざけで作った禁止や制限をスルーしたルール違反デッキなのでデッキ代えていいですか？」

いや、なんでこのデッキなんだ？

まあ強いが、ルール違反だし……。

これは闇のデュエルの時に使う、禁止制限無視デッキの一つだ。大量に作ったが野試合で使うべきじゃないからな……。

「あのカードさえあれば勝ちも確定に近い！君みたいな馬鹿にはな！使ってみな！」

まさか申し出を棄却するとは……。
ワンキルしちまうぞ……。

「俺はレスキューキャットを召喚」

ヘルメットをかぶった猫が現れる。

レスキューキャット

ATK300

「いや、なんで裕也君はいきなり禁止カードを使ってるんですか！」
「間違えたって言うてるだろ！って動き出したし！」

上へ上へと黒い天井を上がって行く床、迫り来る天井、潰されるのか？とか考えてしまう……。

ニヤリッと笑う右京先生を放置してそこそこ速い速度で天井へ向か

っていく・・・。

「皆、ミンチになっても火葬してくれると信じてるからな・・・」
ああ・・・どうせ潰されるなら一思いにグチャグチャにしてくれ。

「縁起の悪い事言わないでください!」

そんな委員長の意見をスルーしながら上を向いてみる。

すると天井が開き、×字の様な形に交わった鉄骨で支えられた柱が現れる。

そこがレールのように扱われて、どんどん上へ上がっていった。

「外へ出ましたよ!」

委員長が騒ぐが、無視だ、無視!

「ここが、ウイルス爆弾の成果をみる特等席です」

そうこうしていると、残り時間が15分しかなかった。

そういうデュエルしだした直後10分くらい思考停止したなあ・・・。

「レスキューキャットの効果でXーセイバー エアベルンとXXーセイバー ダークソウルを特殊召喚!」

長い刀のような爪を持つ獣と巨大な鎌を持った死に神のようなモンスターが現れる。

Xーセイバー エアベルン

ATK1600

XXーセイバー ダークソウル

ATK100

「なんだね?その雑魚は?」

見下したような目で、俺のモンスターを見る先生。

あの日を、康太と会ったあの日を思い出すな・・・。

「俺の仲間を侮辱するな！XXーセイバー フォルトロールを手札から特殊召喚！」

巨大な剣を持ったオレンジ色の鎧を着た人型のモンスターが現れる。

XXーセイバー フォルトロール

ATK2400

「フォルトロールはフィールドにXXーセイバーが2体以上いれば手札から特殊召喚できるんだ！ワン・フォー・ワンを発動！手札からモンスターを捨て、手札かデッキからレベル1のモンスターを出せるんだ！現れろ！XXーセイバー レイジグラ！」

赤を基調とした服を着た二足で立っている蜥蜴が現れる。

XXーセイバー レイジグラ

ATK200

「レイジグラの効果でフォルトロールを墓地から回収する。レベル6 XXーセイバー フォルトロールにレベル3 XXーセイバー エアベルンをチューニング！獣達による祈りが通じる時、新たな力を手に入れた司令官が姿を見せる！シンクロ召喚、現れろXXーセイバー ガトムズ！」

大剣を持った、機械的な鎧を着込んだ、赤いマントを着けたモンスターが現れる。

XXーセイバー ガトムズ

ATK3100

「ガトムズの効果は使うまでもないか。マスドライバーを発動。データソウルとレイジグラを発射！」

右京先生に向かって、黄色い弾が2回放たれ、右京先生がダメージを受けた。

右京先生

LP4000↓3700↓3400

「さて、ガトムズとフォルトロールがいるからフォルトロールを出す。フォルトロールを1体発射！フォルトロールの効果でレイジグヲを特殊召喚し、フォルトロールを回収！」

「つまり・・・無限発射ループか！」

「そうだ！」

そうして右京先生のライフは燃え尽きたのだった。

アストラルが無言で手を伸ばし、何かカードらしき物を抜いていた。おそらくNO・シリーズだろう。

「先生、先生！」

小鳥が右京先生を揺すっている。

「はっ・・・。私は何を？」

右京先生が目覚め、そう呟く。

「先生！早くウィルス爆弾を止めてくれよ！」

遊馬はそう右京先生に向かって言う。

「ウィルス爆弾。駄目だ、あれは止める事はできない。解除スイッチは無いんだ」

右京先生は俺の苦労を無駄にするような発言をした。

「・・・くっ・・・やはり俺はミンチになる運命なのか・・・？」

俺は膝から崩れた。

おそらく見た感じ、悔しそうな、泣きだしそうな顔をしているだろうな・・・。

せめて童貞は棄てたかったなあ・・・。

「小鳥！死ぬ前に童貞を棄てたいんだが・・・駄目か？」

「駄目に決まってるでしょ！」

小鳥はかなり顔を赤らめながら怒鳴る。

まあ仕方ないか・・・。

そしてしばらくすると3、2、1と機械的な声が話した。

死を受け入れようとか思いながら、小鳥を抱きしめ、守ろうとするような体制になった。

ピー、というような音がしたが何も起こらなかった。

「ああ！これで街が大パニックに！」

「もう終わりだぁ！」

「大パニックって何の事だい？」

騒ぐ遊馬と委員長の方へ歩きだす右京先生。

・・・って小鳥を抱きしめたままなの忘れてた！

「あれ？爆弾は？って裕也！？」

「誰がそんな恐ろしい事を？」なんて右京先生が言っているが、そんな事はどうでもよかった。

目の前の小鳥との問題よりも重大だがな。

「ごめん・・・」

「あんな事して・・・まあいいけど。守ろうとしてくれたみたいだし」

そう言いながら遊馬の方へ歩きだす小鳥。

「巨大バグマンだ！」

そんな声が聞こえたが俺はさっきまで小鳥を抱きしめていたという恥ずかしさのあまり、あっちに向かおうとは思えなかった。

風のせいであまりあっちの声が聞こえないが、別にいいや。

その帰り道、使わなかったN.O.を遊馬に返した。

・・・小鳥と目線を合わせられず、顔すら見られなかったのは笑い話だろうな。

嘘と真実とHA☆GAもどき!?

「姉ちゃんにお使い頼まれてたの忘れてた!」

遊馬と共に走る俺、不動裕也は今、半額弁当を求めて走っている・
・訳ではなく遊馬の家に泊まるので、お使いの手伝いをしている。

毎月100万円程の金がトリシューラから振り込まれているが、あの程度裕福に過ごせるのだが、料理ができない俺は遊馬の家族や小鳥に助けてもらっている。

なんせ俺が飯を作ったら黒く焦げた不気味な物ができてくるし。

『あの少年・・・』

アストラルがボソツと呟いたが特に関係は無いだろうし無視だ無視!

・・・次の日・・・

夜中、ほぼ徹夜でデュエルしていた。

そのためお互い眠いまま登校している。

マジで泣きたい・・・眠いしアニメ見逃したから録画したの見なきゃならないし。

録画したの見る時の起動する為の時間、嫌いなんだがなあ・・・。

「アストラル? コイツって?」

デブ男がそう言っている。

仕方ないか、アストラルが見えていないんだから。

「お前等、いつも幽霊って呼んでるだろ? 私は幽霊ではない。アストラル世界から来たアストラルだ・・・って」

そこそこ似てるが伝わらないだろうがよくやるなあ・・・。

「コイツ昨日から本当煩くてさあ!」

『コイツではない、アストラルだ』

漫才かよ・・・。

見えるからこそ不便だなあ。

コイツ・・・もといアストラルのせいで時々黒板？が見えないし。

「あー！わかったよ」

「名前までつけちゃってる」

「これは重症だな」

「先に教室行っって寝るよ。じゃあな！」

さて、眠いしさっさと寝よう！

そう決めて俺は走る。

眠いから！

・・・放課後・・・

「でね、遊馬ったら・・・」

「大変だったな・・・。郵便とかでそのモンスターエクシーズを渡されてたりしてな」

「笑い事じゃないわよ！」

「悪い悪い」

小鳥に飯を作ってもらっている。

理由？

材料費あっちが作ってくれるって言うから頼んだだけさ。

「それじゃ、できたし渡し帰るわ」

「ありがとう。じゃあ明日」

「じゃあね、裕也！」

そう言っって小鳥は帰った。

・・・飯食ってアニメ見て寝るか。

・・・次の日・・・

「おっは「遊馬君、君がそんな人だとは思いませんでしたよ。裏であんな事してるだなんて」

「裏？俺何かしたか？」

謎の話し声が聞こえるな。

めんどくさい事じゃなきゃいいが。

「何かしたか？白々しいにも程がありますね。皆の携帯に匿名の写真が送られてきた！」

なんだろう、めんどくさい事でしかないような・・・。

「とどのつまり、君のした事はわかってるんですよ？」

委員長が叫ぶ。

「下手な合成写真だなあ・・・。誰が作ったんだ？いや、下手くそすぎて笑いそうだ」

皆のD・パッドやD・ゲイザーの突き出している画像を見て思わず噴き出しそうになった。

朝飯のコンビニのおにぎりが胃からな・・・。

「俺ならもつと上手く作れるっての。てか皆こんな下手な合成写真に騙されてるのか？情けない。さっさと座れ。時間の無駄だ。それとも俺がなぜ合成写真か見抜けるかって？説明するぞ。まず花壇を荒らしている画像は顔がズレてるし、右京先生への悪戯はバケツが不自然だし、カンニングのはもはや首が変な方向に曲がってるし、蛙の悪戯のは遊馬が何故かなり小柄になってるし不自然すぎるわ！こんなに下手くそな合成写真、初めて見たぜ」

もはや不自然な何かの証拠に突き出したら笑われるっての。
バカとテストと召喚獣でも読むか・・・。

・・・放課後・・・

「災難だったな、遊馬」

「そうだよな、裕也。全く誰がこんな事を・・・」

俺達はショッピングモールを歩いている。

遊馬はデュエルがしたいみたいだが生憎デッキがえげつない物すぎて拒否している。

「遊馬君！こんな所で何してるウラ？」

「徳之助？」

・・・数分後・・・

今朝の話を遊馬が徳之助に話している。

コイツからは怪しい臭いがする・・・気をつけなきゃな。

「そんなことがあったかウラ・・・」

「皆に疑われたんだぜ？さすがに凹むよな・・・」

「でも俺は遊馬君を信じてるウラ」

二人は意気投合したみたいだが、油断はできない。

HA☆GAみたいな眼鏡をかけてるし。

「え？」

「実は俺、シャークと遊馬君のデュエルを見ていたウラ」

「待て、俺はあの場所にいた。お前は見当たらなかったぞ？どういう事だ？」

俺は徳之助にとりあえずカマをかけてみる。

絶対に言い訳してくるか何かしら言っって言いくるめるはずだ。

「とは言っても最後にトドメの一撃の前だけドウラ」

言い訳だろうな。

更にカマをかけるか。

「なら遊馬がああデュエル中、一番最後に使った魔法カードを答えろ」

間違えたらコイツが全ての犯人で狙いはおそらく、ナンバーズだろう。

「それは・・・確かダブル・アップ・チャンスウラか？」

「遊馬、コイツが全ての元凶だ。狙いはおそらくNo.39だ」

遊馬に俺が推理し、導き出した答えを言う。

コイツに告白させてやる！

「何で嘘だと思いうラ？」

白々しい・・・。

証拠なら色々あるが、どれを言おうか？

あれにしよう！

「皆の携帯に送られた画像のアドレスが気になって調べた・・・少々犯罪に近い事を授業中にしたが特に気にする事じゃないかな？話を戻すが、そのアドレスは徳之助の物だった・・・つまり、そっちが騙されてるか徳之助の犯行かって事だ。まあ最後のあの質問で正解していれば騙されていたかもしれないって判断してたが、徳之助が犯人って事がよくわかったよ。さあ何が目的だ？」

自白しなかったらどうしようか・・・？

犯人はほぼコイツだろう。

「一つ聞きたいウラ。何故最後に発動した魔法カードを聞いたウラ？」

「もちろん見ていなかったって証拠になるからだ。まず、見ていたら破天荒な風ってわかるはずだし、しかもデュエルが下手な事で有名な遊馬が全国大会に出場したシャークを倒したっていう大きな出来事を忘れるはずないだろ？」

見ていた人全員が全員忘れられないだろうな。

実際、遊馬とシャークのデュエルを見ていた奴に確認をとったが忘れてた奴はいなかった。

「・・・デュエルウラ」

・・・へ？

「遊馬とデュエルして負けた場合、遊馬のデッキをエクストラデッキごと貰うウラ！俺が負けたら真実を教えて皆に謝るウラ」

遊馬がこのデュエルを受けなければいいんだが・・・。

まあ本人に任せるか。

「良いぜ、受けてやる！」

ゑ？

嫌な予感が凄くする・・・。

何かを失うようなそんな予感が・・・。

「Dゲイザーセット！デュエルターゲット、ロックオン！」

『ARビジョンリンク完了』お互い、デュエルを開始するためにDゲイザーを装備、使用する。

勿論俺は着けている。

「デュエル！」

このデュエル・・・見守るしかないのか・・・。

「先行は貰うウラ。ドローウラ！」

徳之助は勢いよくデッキトップのカードを引き、後ろへ跳ぶ。

「俺は裏側守備表示でモンスターをセット、ターンエンド」

徳之助

手札 5枚

モンスター セットモンスター 1枚

「セットモンスターか・・・下手すりゃ一撃で終わらせるカードもあるし厄介だ・・・」

ちなみに一撃で終わらせるカードとはダイスポットだ。

6000バーンは馬鹿にできんからな・・・。

「マジかよ・・・。俺のターンドロー！俺は異次元の女戦士を召喚！」

黒い革のような材質の短パン、袖の無い上着を着た、ビームのようなナイフを持つ女性が現れる。

異次元の女戦士

ATK1500

「異次元の女戦士で裏守備モンスターを攻撃！」

異次元の女戦士はそのナイフを徳之助の方へ向け、刺しに行った。

「ハリセンボーン、現れるウラ！」

セットモンスターは、心臓以外の器官が無く、体中に針がはえた、骨でできた魚だった。

ハリセンボーン

DEF400

「守備力400、異次元の女戦士の勝ちだ！」

「しかしリバース効果ウラ！400ポイントのダメージを与えるウラ！」

無数にはえた針が遊馬に向けて放たれた。

遊馬

LP4000↓3600

「けど、異次元の女戦士の攻撃力の方が上だ！攻撃は通る！」

ハリセンボーンは光の粉になり、消えた。

「これで俺はターンエンドだ！」

遊馬

手札 5枚

モンスター 異次元の女戦士

「俺のターンドロウラ！守備表示でモンスターをセット、さらにカードを2枚伏せてターンエンドウラ！」

徳之助

手札 3枚

モンスター セットモンスター 1枚

魔法罫 リバースカード 2枚

・・・手札次第だが終わるな。

しかしなんかまだ嫌な予感はあるし・・・。
仕方ない、割り切ろう。

「俺のターンドロー！俺はガガマジシャンを召喚！」

不良のような見た目だが尖った帽子をかぶり、ブラックマジシャンのような服装なモンスターが現れる。

ガガマジシャン

ATK1500

「さらにカゲトカゲを効果により特殊召喚！」

影なのだが、蜥蜴のような形をし、赤い目が浮き出ているようなモンスターが現れる。

カゲトカゲ

ATK1100

「カゲトカゲで裏守備モンスターを攻撃！」

カゲトカゲは裏守備モンスターに向かっていく。

『「その裏守備モンスターを攻撃してはいけない（したらまずい）
！」』

アストラルとかぶりつつも嫌な予感がするセットモンスターに対して警戒するよう伝えようとしたが、もう、手遅れだった。

「サンダー・ブレイクを使い、異次元の女戦士を破壊するウラ！」

突如雷が落ち、異次元の女戦士は破壊された。

その後、カゲトカゲはセットモンスターに体当たりした。

「現れるウラ、チュウボーン！」
鼠の骸骨のようなモンスターが現れる。

チュウボーン
DEF300

「守備力300！よし、これなら斃せる！」
「リバーズ効果ウラ。相手フィールド上にチュウボーンJr.を3
体特殊召喚できるウラ！」

遊馬のフィールドに、小さなチュウボーンが3体現れた。

チュウボーンJr.
DEF300

カゲトカゲの体当たりにより、チュウボーンは破壊された。

「ガガガマジシャンでダイレクトアタック！」
ガガガマジシャンは何故か滑空し、徳之助を殴った。
殴られた徳之助は1m程飛んでいった

徳之助
LP4000↓2500

「俺はレベル1のチュウボーンJr. 3体でオーバーレイ。3体で
オーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる、ベビ
ー・トラゴン！」

可愛らしい、虎の毛皮の猫のような、小さな羽がはえたモンスター

が現れる。

ベビー・トラゴン

ATK900

「永続罨、ウラトラC、発動ウラ！No. 39とやらは頂くウラ！」

「ベビー・トラゴンを渡したのも徳之助か……。まあ当たり前だよな。前から渡そうとしてたし」

・・・ホープが奪われたか。

まずい、マズすぎる！

白い羽がついた鎧を着た騎士のようなモンスターが現れる。

No. 39 希望皇ホープ

ATK2500

「このデュエル、勝ちを貰ったウラ」

「・・・ホープ・・・」

徳之助

LP2500

手札 2枚

モンスター No. 39 希望皇ホープ

魔法罨 ウラトラC

遊馬

LP3600

手札 4枚
モンスター

ガガガマジシャン

カゲトカゲ

ベビートラゴン

裏切りと代償（前書き）

新たなオリキャラの登場です！

裏切りと代償

アンテイルールで奪われそうになるナンバーズ、そしていきなり光の糸が現れ、アストラルが包まれていく。
まるで繭を作るかのように・・・。

徳之助

LP2500

手札 2枚

モンスター No. 39 希望皇ホープ

魔法罫 ウラトラC

遊馬

LP3600

手札 4枚

モンスター ガガガマジシャン カゲトカゲ ベビー・トラゴン

「まさかコイツ、消えかかっているのか?・・・俺がデュエルを受けたから・・・」

遊馬は驚いたかのように言う。

確かに今のアストラルには力がなさそうだ。

「何をしているウラ?早くターンエンドするウラ」

コイツ、優しいな。シャークとかエンド宣言、聞かずにターン進めたが。

「ターンエンドだ!」

「覚悟ができたみたいだなウラ。一気にカタをつけてやるウラ。俺のターン、ドロウウラ!俺は希望皇 ホープでカゲトカゲを攻撃するウラ!ホープ剣スラッシュ」

ホープは腰の刀でカゲトカゲを切る。
カゲトカゲは破壊され、光になり消えた。

遊馬

LP3600↓1400

「俺はモンスターをセットしてターンエンドウラ！」

徳之助

手札 2枚

モンスター No. 39 希望皇 ホープ セットモンスター 1体

魔法罫 ウラトラC

「俺のターンドロロー！俺はレベル3のガガガールを召喚！」

魔術師の様な帽子に短髪で金髪 of 髪、腰にピンク色のリボンを巻き、
回りに濃いピンク色の布が舞っている、そしてミニスカートを履いた
美少女が現れる。

ガガガール

ATK1000

「ガガマジシヤンの効果発動！レベルを1に変更！そしてベビー・

トラゴンの効果発動！ガガマジシヤンをダイレクトアタック可能
にする！更に受け継がれる力を発動。ガガガールをリリースしガ
ガマジシヤンの攻撃力を1000ポイント上げる！」

ガガマジシヤン

ATK1500↓2500

「行け、ガガマジシヤン！ダイレクトアタックだ！」

徳之助

LP2500↓0

このダイレクトアタック後、小鳥達がやってきた。

・・・オイ、ガガガガールの効果使えよ。

ナンバーズが戻って来た為アストラルは復活した。

なんとも言えんデュエルだわ・・・。

徳之助、アンティ忘れてないか？

『良くやった。これでナンバーズは守られた』

「別にお前の為にやった訳じゃねーよ」

ガガガール・・・遊馬の家ではらまかれたカードの一枚でたまたま俺が見つけ、入れさせた優秀ではないが戦えるカード・・・。

「遊馬！」

「よく勝てたな！」

デブ男と小鳥がやってきた。

なんとかなってよかった。

俺は安心して惣菜やらを買える。

「んじゃ、帰るわ」

次の日、徳之助と遊馬が仲良くなっていた・・・。

和解できてよかったな・・・。

ちなみに徳之助は皆に謝り、許してもらっていたし反省もしていた。

・・・別地点・・・

「ここは一体・・・？私の身体も縮んでるし・・・」

私は康太の葬式の後、裕也が氷の柱に触れて消えたのを追い掛けようとして・・・これ以降が思い出せないし・・・。

近くに大きい一軒家がある、どうやら二階建てみたいね。

他には普通に木があったりしているけど・・・家の形が住んでいたはずの世界には無いような形で、おかしい。

誰かの足音が聞こえてくる。

その足音の主を見ると、元の世界での友人、不動裕也だった。

「誰？・・・あれ、知り合い？」

少し汗かいてるわね。

「私を忘れたの、裕也？」

「いつ頃会いました？」

汗が無茶苦茶分泌されてるわ・・・。

もう一押しね。

「仲良くなったきっかけは文化祭の・・・」「桜委員長、すんませんでした!」・・・智佳でいいわよ。桜委員長って呼び方、あまり好きじゃないから止めてね」

裕也が土下座したから焦った・・・。

どうしてなの？

「ここは何処なの？」

「ハートランド。俺達は殺されて転生だとさ・・・。アニメの世界にな」

「ええ！」

私は久しぶりにかなり驚いた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8637t/>

遊戯王ZEXAL ～転生少年の生き様～

2011年12月20日05時53分発行